令和二年　気良歌舞伎　ぎふ清流文化プラザ公演

仮名手本忠臣蔵五段目　山崎街道鉄砲渡しの場

同　二ツ玉の場

六段目　与市兵衛内勘平腹切の場

【五段目　山崎街道鉄砲渡しの場　二ツ玉の場】

配役

早野勘平

千崎弥五郎

与市兵衛

斧定九郎

猪

【山崎街道鉄砲渡しの場】

〽鷹は死しても穂は摘まずと、譬えに漏れず入る月や（チョン）

晴間をここに松の影、向こうより来る小提灯これも昔は弓張りの灯火消さじ濡らさじとしのいで急ぐ夜の道。

勘平　ア、イヤ、卒爾ながら火をひとつお貸し下され。

〽旅人もちゃっと身構えし。

千崎　この街道は物騒と聞いて合点の一人旅。見れば飛道具の一口商い、得こそは貸さじ、出直せ、出直せ。

〽びくと動かばひとうちと眼を配れば。

勘平　なるほど。盗賊とのお目違いごもっとも千万。われらはこの辺りの猟人、先刻の大雨に火口をしめし難渋至極。鉄砲はそちらへお渡し申せば、自身に灯をつけ、お貸し下され。

〽他事なき詞顔付を、きっと眺めて。

千崎　和殿は早野勘平ならずや。

勘平　さ言うは千崎弥五郎殿。

千崎　まずは堅固で。

勘平　貴殿もご無事で。

両人　これはしたり。

〽絶えて久しき対面に、主人の御家没落の、胸に忘れぬ無念の思い、勘平はさしうつむき、しばし詞もなかり

しが。

勘平　面目もなき我が身の上。古朋輩の貴殿にも、顔を得上げぬ我がしだら。大事の場所にもありあわさず、どの面下げて御詫びと、心を砕く折りから、密かに様子を承れば、大星殿御親子をはじめとして、故殿のうっ憤を散ぜんと、寄り寄りの思し立ちあるとの噂、何卒 某 を連判の数にお加え・・・。

千崎　これさ勘平、身の言訳に取り交ぜて御企ての連判のと、左様な噂かってなし、左様な噂かってなし。まこと亡君の御恩を思わば、ナ・・・。

〜石碑になぞらえ大星の大事を余所に知らせしは、実に朋輩のよしみなり。

勘平　かたじけなし弥五郎殿、なるほど、石碑と言い立てて御用金の御企て・・・。某 とても金子ととのえ、それを功に御詫びと、心は千々に砕けども、情けなき今のこの様・・・。なれども軽が親、与市兵衛と申すは、それはそれは頼もしい百姓。元の武士に立ち帰ると言い聞かさば、わずかな田地も我が子のため、何しに否とは申しますまい。明日にも金子ととのえて、貴殿にお手渡しつかまつれば、大星殿へお執り成し、よしなに頼む弥五郎殿。

千崎　しからば貴殿の思し召し、大星殿へ願うてみん。

勘平　かたじけない。シテ貴殿のご旅宿は。

千崎　すなわち手前が旅宿は、数右衛門殿と同宿にて、三条小橋家主吉兵衛方とお訪ねくだされ。

勘平　心得た。

千崎　サ、勘平どの、火を・・・。

勘平　かたじけない。

（勘平、火をつける）

千崎　シテご貴殿のお住まいは。

勘平　手前、住まいはこの山崎の渡し場を左へ取り、百姓与市兵衛（よいちべえ）とお訪ねくだされ。

千崎　百姓与市兵衛（よいちべえ）殿でござるな。しからばこれにて。

勘平　アイヤ、弥五郎殿、この行く先はなお物騒、必ず御油断（ごゆだん）召さるるな。

千崎　何さ何さ、石碑成就（せきひじょうじゅ）のそれまでは、蚤にも喰わさぬこの体、御返も堅固で。

勘平　左様ござれば弥五郎殿。

千崎　勘平殿。

両人　お別れ申す。

へさらばさらばと両人が、ひき別れてこそ。

【山崎街道二ツ玉の場】

へまたも降り来る雨の足、人の足音とぼとぼと、直ぐなる心堅親仁（おやじ）。

（花道より与市兵衛、七三にて）

与市兵衛　えらい雷さんやったなあ。この間に少しも早う行きましょ、行きましょ。

（与市兵衛、稲村前でつまづく。）

与市兵衛　ええい、ままよ。在所へはほど近いし、雨も小降りになってきた様子じゃ。ちょうどここに稲村があるわい。ここで一休みしていきましょうか。ああ、よい所に稲村があったわい。ヤレヤレくたびれた、くたびれた。

それにしても、ばばや娘がさぞ待っていて、このことを聞いたらさぞ喜ぶことであろう。したが、婿殿が出世するには大枚のお金がいるとのこと。水のみ百姓のわしらには貯えもなく、どうしようかと思案をしていたら娘のお軽が身を売ってまで夫に出世をさせたいという健気な言葉。それじゃによって祇園町の一文字屋へ行き、このことを話したら、年は五年で百両とすぐに話が決まり、半金の五十両を受け取ってきた、これというのも皆、一文字屋さまのお陰じゃ。もうし一文字屋さま、ここから改めてお礼を申しまする。ほんにありがとうございます。ありがとうございました。もうし一文字屋さま、ほんにありがとうございました。ありがとうございました・・・。

（与市兵衛、財布をかかげる。稲村から定九郎の手が出て、財布を掴む）

与市兵衛　コレ誰じゃ、何をするのじゃ、コレ何を。

（定九郎、与市兵衛を刺し殺す。身を整えて、財布の中身を数える）

定九郎　　五十両。

〽死骸を直ぐに谷底へ、はね込み蹴込み泥まみれ、はねは我が身にかかるとも、知らず立ったる向こうより。

（定九郎、花道まで行くが、猪がくるを見て稲村へ。花道より猪が出て通り過ぎる。それをみて定九郎出る）

〽あわやと見送る定九郎が、背骨をかけて二ツ玉、死してんける。

（定九郎、撃たれ倒れる）

〽猪うちとめしと勘平が。

（花道より勘平出る。暗闇をさぐりながら。）

勘平　　こりゃ人。

旅の、旅の人いのう。アアえらいことを。薬、薬は、薬はないか。

（懐中の財布を触り、驚いて逃げるが、花道で思い入れ。立ち戻り財布を取る）

〽飛ぶがごとくに。

（勘平、花道から出て行く）

【六段目　与市兵衛内勘平腹切の場】

配役　早野勘平

母おかや

女房お軽

一文字屋おオ

女衒の源六

不破数右衛門

千崎弥五郎

駕籠屋（２名）

（幕開き）

（お軽、源六にお茶を渡す）

源六　おおありがとよ、ありがとよ。女将さん、これが例の奉公人でございます。いい玉でござんしょう。これなら安心でございますよ。

お才　綺麗な御子えなあ。

源六　おお、お袋さんよ、ちょいとちょいとこっちへ来てくんねえな。ときに、ここにおいでなさるのが祇園町の一文字屋の女将さんだ。お前からもよく御挨拶申し上げておきなよ。

おかや　左様なれば貴方様が御家様（おいえ）でござりまするか。私はこれの母親でござりまする。この度はなにかとお世話、ふつつかな者ではござりますれど、何分よろしゅうお願い申します。

お才　そんならあんたさんがお母はんどすか、おとっつあんには夕べお目にかかりました。私は一文字屋の女房どすが、娘はんのことは心配せんと、安心しておいやすえ。

おかや　どうぞよろしゅうお願い申しますえ。

源六　そうだそうだ、そうお願い申しておきゃあ、もうこれで大安心というもんだ。ところでお前さん達も知ってのとおり、夕べとっつぁんが店へきて、おかみさんといろいろ相談の末、娘御の年季は丸五年で、給金は百両と決めたが、とっつあんが言うのには、どうしても今夜中に渡さなきゃならねぇ金がございますから、半金の五十両だけ、お手渡しを願いとうございますと、おめえ、涙流して頼むじゃ

ねえか。そこで俺からも女将さんに御無理を願って、証文のうえ半金の五十両手渡して、後金の五十両は奉公人と引き替えの約束で、その五十両を受け取るともう喜んで帰(けえ)んなすったが、さぞ帰(けえ)りは遅くなったろうナ。

おかや　そんなら親父殿は、あなた方と連れ立ってではござりませなんだか。

源六　何をお前、連れ立つどころの騒ぎじゃねぇ。金をもらうと、喜ばせようってんで、急いで帰(けえ)んなすったが、未だに帰(けえ)ってこねえところをみると、こいつはもしや稲荷屋でもうろついて、レコにでもつまれちまったんじゃねえかな。ハハハ、まさかあの年でそんな馬鹿な事もあるめえが、どっか他に寄るところでもありやしねぇかい。

お軽　イエイエ、寄らしゃんすところは、ナア母(かか)さん。

おかや　ないともないとも。すこしも早う金ととのえて、そなたやわしの喜ぶ顔を見ようと、息せき戻らにゃならぬはず。こりゃマア、合点の行かぬことじゃわいのう。

源六　マ、マ、合点の行く行かねえは、そっちの詮索だ、いまに帰んなすりゃ分かる事だ。もし女将さん、あいすいませんが、後金の五十両、どうか出しなすっておくんなせい。

お才　そんなら後金の五十両確かに渡しとくれ。

源六　確かにお預かりいたします。それじゃあナお袋、今も言う通り、半金の五十両は夕べとっつあんに手渡して、これは後金の五十両。都合あわせて百両、ナ、よく改めて受取ってくんねえよ。

おかや　ア、ちょっとお待ちくださりませ。今に親父どのも戻りましょう程に、それまでお待ち下さりませ。

源六　おいおい冗談言っちゃいけねえよ、大金を出して抱えた奉公人だぁ、一時違やぁ、レコが違うんだよ。

サア女将さん、参りましょう。

お才　ああそうしようね。

源六　じゃぁとっつぁんによろしく言っといてくんな。何もそんな心配（しんぺい）することはありゃしねえんだよ。とっつぁんが帰ってくりゃ分かることだ。おい、駕籠屋たのんだぜ。

駕籠屋　ヘイ。

（お軽、駕籠に乗せられる。花道より勘平）

勘平　ヤ、そちゃお軽じゃないか。

お軽　こちの人。

勘平　見りゃ我が身は駕籠にのって、どこへ行くのだ。猟人（かりうど）の女房が、マ、お駕籠でもあるめいじゃねえか。

まあともかくこの駕籠、戻せ、戻せ。

源六　あぶねえよ、あぶねえってんだよ。何をしてやんだよ。

（駕籠、戻され。お軽もどる。源六は門口、お才は押し戻されて家の中へ。）

お軽　母（かか）さん、こちの人が戻ってじゃわいな。

勘平　母者人、ただいま戻りましてござります。

おかや　おお良い所へ戻って下されたの。

勘平　母者人、夕べはまぁえらい雷でござりましたな。

おかや　わしも娘も怖うて怖うてなりませんなんだわいのう。

勘平　左様でござりましょう。母者人は日頃より大の雷嫌いゆえ、私はもうたいていお案じ申しておりました。

おかや　もう怖うて怖うて怖うてのう。そうして、そのきつい降りのときはこなた、どこにいやったぞいのう。

勘平　私でござりまするか。私はあの一本松の下で、雨宿りをいたしておりました。

おかや　そらまぁ難儀なことじゃったのう。

勘平　えらい難儀なことであったわいのう。まぁまぁちとわしも・・・。

（勘平、源六と顔を見合わす。源六隠れる）

勘平　母者人、あそこにおいでのあのお方、ありゃ、どこのお方でござりまする。

おかや　ア、ア、あのお方はのう。

勘平　あのお方は。

おかや　あのお方は・・・あのお方じゃわいのう。

勘平　何をおっしゃりますることじゃやら・・・。

（勘平、奥のお才を見て）

勘平　これ、これこれ女房、あそこにおいでのあのお方、ありゃどこのお方じゃ。

お軽　あのお方は。

勘平　ン、あのお方は。

お軽　あのお方は・・・、やっぱりあのお方じゃわいな。

勘平　何じゃやら・・・母者人から女房どもまでが、あのお方はやっぱりあのお方・・・。あのという人もあるめえじゃねえか、何を言うやら・・・。母者人、お前様にな、せっかくつくろうてもろうたこの着物、夕べの雨でもう、台無しにしてしまいましてな。

おかや　それは後でわしが洗うておくほどに、早う着替えたがよいぞや。コレ娘、着替えを持っておじゃ。

お軽　アイアイ。

勘平　こりゃ、軽。着替えを持って来るなら、御紋服（ごもんぶく）を持って来てくりゃれ。

お軽　アイ。

勘平　ああ、こりゃ、ついでに大小（だいしょう）も持って来てくりゃれ。

お軽　あの大小（だいしょう）も・・・。

勘平　何であろうと持って来いというに。

お軽　アイ。

おかや　早う持っておじゃ。さっぱりとしたがよかろうぞいのう。これ婿殿。

勘平　ハイ。

（お軽、奥へ入る。勘平帯をほどきながら）

おかや　夕べの大雨でのう、どこもかしこもだだ漏りじゃわ。

勘平　ああこれはまた、こちらからこちらへ、えらい回っておりまするなあ。

おかや　婿殿見て下され、この仏壇の上の方にまで回っておりまする。

勘平　ああ、これはまた仏壇の中がえらい漏りよう。よろしゅうございまする。私がまた暇をみて繕うてしんぜましょうほどに。

おかや　頼みましたぞ。

勘平　ご安心・・・。

（おかや、帯を片付けようとして縞の財布を手に取る。勘平それを慌てて取って）

勘平　ハハ・・・。

おかや　ハハ・・・。

勘平　ハハハ・・・。なんでもございませぬ。

（お軽、着替えと大小を持って来る）

お軽　かかさん頼みまする。よございますか。

（お軽、着替えを手伝う。）

お軽　サ、着替えて下さんせ。まぁほんにひどい降りで、さぞ難儀な事でござんしたろう。

勘平　ああ、難儀であったわいのう。

お軽　大抵や大方、案じたことではございませぬ。

勘平　わしもなあ、気になってはいたものの、なにせあのひどい降り故、あの一本松の下で、もう一足も動けなんだのじゃ。

お軽　そうでござんしょうなあ。

勘平　あ、そうしてなあ母者人、雷といえばな、雷が五作の納屋へ落ちましてナ。

おかや　そりゃびっくりしたであろうの。そうして誰も怪我はなかったかいの。

勘平　ああ、よい塩梅でござりました、誰も怪我はなかったそうでござりまする。

おかや　そりゃ何よりじゃったのう。

お軽　ようございした。

勘平　もうもうしたがたなぁ。もう難儀なことであったわ。昨日の雨で・・・、アア、これでさっぱりといたしました・・・。

（勘平、紋服の紋をおがむ。お軽から大小を受け取って）

これには何ぞ深い様子が、母者人、女房ども、その様子聞こうかえ。

へ様子聞こうとお家の真ん中、どっかと座れば女衒の源六。

源六　どうもおかみさん、何とも申し訳ございません。今、只今、じきに話をしますんで、ちょいとちょいとお待ちなすっておくんなさいまし。（駕籠屋へ）ヤイヤイ、面みやがれ、まぬけ野郎。初めて駕籠をかつぎやしめえし、棒鼻をつっけえされて、おめおめ帰（けえ）ってくる奴があるもんけぇ。まったく、だらしのねえ野郎じゃねえか。まったくまぁ、しょうがねえ野郎だ、まったく・・・。

（源六、中に入る。勘平をよけるようにお才の方へ行く）

源六　女将さん、何ともあいすみませんでございます。

お才　源六さん、こりゃ一体どういう話になっているのえ。

源六　今もう、じきに話をつけますんで、ちょいとちょいとお待ちなすってくださいまし。いま話をつけますんで、しばらくお待ちなすっておくんなせい・・・。

（源六、勘平の方を見て）

源六　へへへ・・・左様なら何でございますかい、あなた様がこちらのお婿さんでございますか。ア、左様でございますか。いやね、婿さんだろうが、御亭主だろうが、こっちの方じゃ大金を出して抱えた奉公人を連れて行くのに、何も文句をいわれる覚えはねえじゃございませんか。

勘平　母者人、私にはコリャ一円合点が参りませぬが、どういうわけでござりまする。

おかや　婿殿の合点のゆかぬはもっともじゃ。が、まぁ聞いてくだされいのう。つねづねそなたに金のいる様子、娘の話で聞いたゆえ、どうぞととのえて進ぜたいと思うばかりで、一銭の貯えもなし。そこで親

父どのの言わっしゃるには、ひょっと婿殿の気に女房を売って金ととのよ・・・イヤイヤ、そのようなこと思うてはいさっしゃるまいが、もし二親（ふたおや）の手前、遠慮していやっしゃらぬものでもない。コリャいっそ婿殿には知らさずに・・・、娘を売ろう。まさかの時には切り取りするも侍のならい、女房を売っても恥にはならず、御主（おしゅう）のお役に立てる金、ととのえておましたら、まんざら腹も立てさっしゃるまいと、夕べ親父殿が祇園町へ話の取り決めに行て、今に戻ってござらぬゆえ、親子案じているところへ、あの衆方がおいでになり、夕べ親父殿へ半金の五十両渡し、今また後金の五十両・・・、お、そうじゃ、この・・・この五十両と引き替えに娘をつれていこうと言わっしゃるので、親父どのが戻るまでお待ち下さりませとお願い申したれど、一時違えば何やらが違うと言うて聞き入れず、どうでも連れて行こうと言わっしゃる。わっぱさっぱのそのところへ、そなたが戻ってきやったのじゃが、こりゃどうしようぞいのう勘平どの。

勘平　それで様子ががらりとわかりました。まずもって、親父さまの思し召し、母者人、お前様のお心遣い、女房ども、そなたの親切、忘れはおかぬ。かたじけない、かたじけない・・・。が、もう、もう母者人、女房をやるには及びませぬ、こちらにもチト良い事がござりましてナ。

おかや　おお、その良い事とはえ。

勘平　ハイ、その良い事と申しまするはな・・・。あ、それはまた後からお話申しましょう。何がさて第一、親父様のお戻りにならぬうち、女房はこりゃ渡されませぬ。

源六　おお、もしもしもし、金で抱えた奉公人を何故渡されねえんでございます。

勘平　母者人、どこのお方でございます。

おかや　あちらにおいでなさるのが、祇園町の一文字屋の御家（おいえ）さま、こちらがお手代（てだい）様じゃわいの。

勘平　左様でございましたか。これはこれは知らぬこととて最前よりの何やかやと無礼の段、平にお許しを平にお許しを・・・。何がさて、渡すの渡さぬのと申すこともございませぬ。いわば親なり判がかり、そりゃはやもっとも、夜前親与市兵衛に半金の五十両をお渡しなされたでもあろうけれど、未だに親父様のお戻りに・・・。

源六　ちょちょちょちょちょ、ちょいとお待ちなすっておくんなさいまし。お言葉の中じゃございますが、只今うけたまわっておりますりゃ、あなたさま何とか仰いましたね。そりゃはや、もっとも夜前、親与市兵衛に半金の五十両はお渡しなされたでもあろうけれど、とか仰いましたね。

勘平　ハイ。

源六　へへ、嫌ですね、そのけれどが気に入りませんね。そうじゃございませんか、そのね、けれどとかだろうなんてこりゃ、人を疑る言葉だ。左様でござんしょ。お前さんご存じあるめいが、こちらにおいでの女将さんは、祇園町で一文字屋といやァ、女護（にょうご）の島程大勢の奉公人を抱えておいでなさる女将さんだ。渡さねえ金を渡したというような、そんなしみったれたお方じゃござんせんよ。また、とっつあんもとっつあんじゃねえかよ、こういう人があるならあると、ちょいと俺の耳にさえ入れといてく

れりゃ、何もこんなごたごたしたことは起こら・・・、あ、そうか、こりゃ何だな、お前方、親子夫婦馴れ合いで五十両って金を踏もうってんだな。

勘平　イヤそのようなことは・・・。

源六　イヤそうに違いねえや、面白えや、踏めるもんなら踏んでごらんなせい、踏むんなら踏んでみろい。こいつは本気で掛け合わなくちゃならねえや。

（源六の台詞の間に、お軽、大小を上手へ持っていく）

源六　オウ、ご大層なことを言うようだがな、ぎゃっと生まれて、この商売になってから、江戸の吉原は言うに及ばず、東海道五十三次を股にかけて、富士の山へ腰をおろし、唐崎の松を楊枝に使え、近江の湖水で面ぁ、洗ったお兄いさんでぃ。おめぇっちの様なうぶな奴に、五十両って大金をののさんにされてたまるもんけえ。悪くじたばたぬかしやがるとこのうちへ連雀をつけて背負って立って、その跡へペンペン草はやしてバッタやこうろぎの住家にしてやらあ。おお、おふくろ、この村にも名主もありゃぁ地頭もあるんだろう。出るところへ出て白い黒いをつけようじゃねえか。サア俺と一緒に・・・来ねえかよ・・・・。ええい俺と一緒に来やがれ。

（勘平の手をつかむ。勘平払う）

源六　ナニするんだ手前、俺に刃向かうってのか。面白え、さあやってやろうじゃねえか。

お才　マアお待ち。そんな大きな声出さんかて分かることやがな。

源六　イヤしかしね、わしがこんな掛け合いをしたら女将さんに申し訳ない、女将さんはうっちゃっといておくんなさい。

お才　マアお前が私にすまんと思うて、そんな大きな声で言うのやろうけどな、静かに話をしても分かることや、マァ私にまかして・・・。

源六　しかしこんな奴にね、馬鹿にされたかと思うとね。

お才　源六、あんた私(わて)の言うことが聞かれへんのか。

源六　イヤイヤそういうわけじゃござんせんよ。

お才　そうやったら私に任せて、あんたそっちに行っておいで。

源六　イヤしかしこんな奴にねえ。

お才　何やあんたまぁ人様のおうちへ来て、肌を脱いで、あげ鉢巻きしたりして、しょうのない人やなぁまぁ。サアサア、早よ肌をお入れ。

源六　よろしゅうございます。肌をね、すっとこう・・・。

お才　鉢巻きをお取り。

源六　鉢巻きだってね、こう何でもなく取れるんでございますね。

お才　尻からげもおろして。

源六　エ、尻からげだったおりようとすればおりるんでございますがね、こんな奴に馬鹿に・・・。

お才　エエモウ、そっちに行っておいでと言うのに。

源六　ええい、いまいましいなぁ。

お才　あんたがそんな大きな声を出して喋ったらナ、わかる話もわからん様になってしまうやないか・・・。ホホ・・・そんならあんたはんが、こちらのお婿はんどすか。お初に御目にかかります、私は一文字屋の女房、才と申しまする。どうぞお見知りおかれ下さりませ。

勘平　これはこれは初めて御目（おめ）にかかりまする。知らぬこととて最前よりの何やかやの無礼の段、平にお許しを、平にお許しを。

お才　マアどうぞお手をお上げくださりませ。サアお手をお上げ下さりませ。それではお話もできゃしまへんがナ。サアどうぞお手をお上げ下さりませ、サアお手をお上げ下さりませ。只今は連れの男が段々との失礼、さぞお腹も立ちましょうが、どうぞ御了見なされてくださりませ。実はこうでござりまする。夕べこちらのおとっつあんが、この源六と連れ立って見えまして、急に金子のいることができたによって、娘を奉公に出したいとのお頼みなれど、私の方も只今では奉公人を減らしたいほどの時節でござります故、お断り致しましたが、お年寄りのたってのお頼み、そんなら年（ねん）は五年で、お金は百両と取り決めまして、その半金の五十両を夕べおとっつあんに、お渡し申しました。マア、口でそうやと申しますよりナ、こちらには確かな証文が取ってございますわいナ。

勘平　その証文とやらをお見せ願えますか。

お才　そんならこれを御覧くださりませ。（止めようとする源六に向かって）黙っといて。

勘平　かたじけのうござりまする。

お才　どうぞご覧ください。

勘平　かたじけない。

（勘平、証文を確認する）

勘平　母者人、この印形は親父様の印業でござりまするか、ちょっと御覧のほどを。

おかや　ああ、どれどれ・・・。（目をこらしても見えないのでお軽に向かって）コレ娘、ちょっと見てたも。

（お軽、証文を確認する）

お軽　父（とと）さんのじゃわいな。

おかや　親父どのの印形に相違ないわいの。

勘平　これは確かに親与市兵衛の印形に相違ございませぬ。

（勘平、証文をお才に返す）

お才　そんならおとっつあんの印形に相違ございませぬか。それで安心をいたしましたわいナ。そこでその後金の五十両を、おとっつあんにお渡し申しましたら、喜び勇んでそのお金を手拭いにぐるぐると撒いて、帰ろうとなさりますんで、おとっつあん、そんな大金を持って夜道の一人歩きは物騒ゆえ、今晩は泊まって明日の朝早う帰ったら、と申しましたらナ。いやいやもう一時も早う持って帰って、娘

や婿の喜ぶ顔が見たいと仰いまする故、成程それもごもっとも、そんならコレ貸してあげ・・・丁度幸いこの財布と同じ縞柄（しまがら）の財布を、おとっつあんにお貸し申しましたらナ、その財布へお金を入れて首にかけて喜んでお帰りやしたが、ナァ源六、あれは何時（なんどき）ごろやったえナ。

源六　そうですね、かれこれ引け過ぎ頃でもございましたかね。

お才　そうやったえいナァ。あの引け過ぎ頃・・・引け過ぎというてもおわかりにはおへんでっしゃろがナ。四ツ半か九つツ頃でおしたやろ、訳というのはこういうことでござります。

勘平　左様なれば、その縞（しま）と同じ縞（しま）の財布を親与市兵衛へお貸しなされた・・・。

お才　ハイ、これと同じ縞柄（しまがら）の財布を、おとっつあんにお貸し申しましたわいナ。

勘平　アノちょっと拝見を。

お才　サァサァどうぞ、御覧くださりませ。

勘平　この縞と同じ縞の財布を、親父さまにお貸しなされた・・・。四ツ半ごろ、あの四ツ半・・・。

（門口の方を見て、お軽に気づき）

勘平　軽、茶をひとつくりゃれ。

お軽　アイ。

〜そばあたりへ眼をくばり、袂の財布見合わせば、寸分違わぬ糸入縞、さてはタベ鉄砲で撃ち殺したは　舅（しゅうと）であったか。はっとばかりに我が胸板を二つ玉で打ちぬかるるより切なき思い、とは知らずして女房は。

お軽　モシこちの人、そのようにそわそわせずと、やるものか、やらぬものか、分別してくださんせいなぁ。

勘平　サアあのように言わるるからは、こりゃ行きゃらずばなるまいわえ。

お軽　そんならあの、父さんに逢わいでもかえ。

勘平　親父さまにはお目にかかった・・・が・・・まだ、まだ・・・お帰りのほどは知れまいわい。

お軽　そんなら何と言わしゃんす、お前父さんに逢わしゃんしたかえ。あの夕べ父さんに、ほんに父さんに逢わしゃんしたのかいなぁ。なんじゃいなぁ、なんならそうと言うてくれれば・・・。モシ母さん、こちの人が父さんに逢うたといなぁ。

おかや　そんなら、婿殿が親父殿に逢わしゃったほう、そうかいのう。もし御家さま、婿殿が夕べ親父殿に逢うたげにござりまする。

お才　エ、そんならあのお婿はんが、夕べおとっつあんにお逢いやしたんどすか、アノお逢いやしたん・・・

源六　ああ、そうどすかいなぁ。コレ源六、あの婿はんが夕べな、おとっつあんに逢いはったんやて。

お才　何ですって、婿さんがとっつあんに逢いなすった。

源六　そうやてナ。

源六　あれさ、なんだなぁ。ほうほうほう婿さん、婿さん、おめぇ、とっつあんに逢いなすった・・・。イヤサ、夕べ本当に逢いなすったのかい。なんだな、なんだねな、そんならそうとはなから言ってくださりゃ、何もわっちだってあんな大きな声をするんじゃなかったんだよ。悪気で言ったんじゃねえん

だ。おい、これも商売柄だ堪忍しておくんなせいよ。そのうち、どっかで一杯やりましょ、ねぇ。ハハハ・・・そうかいそうかい、おうおう、婿さんがとっつあんに逢ったていうじゃねえかよ。なぁ、こう話がわかりゃ、オ、まずお袋、お前が安心だ、ナ。それからお娘(むす)が安心、婿さんも安心、おかみさんがも安心、わっちも安心、オ、これが本当のご安心だ、へへへ・・・ようござんした、ようござんした。じゃ、でかけやしょうか。なんだい、そうかい、ほんならはなから、そんな心配することなかったんじゃねえかよ、なぁ。さぁさぁさぁ。

（源六、お軽を連れていこうとするところを、おかやが引きとめる）

おかや　ちょっとお待ちください。

源六　女将さん、例の水放れでございます。ちょいとお待ちなすっておくんなせい。

お才　早いとこ頼むえ。

おかや　お手間はとらせません。

おかや　どれ支度をしてやりましょう。

へ母は納戸へ入りにける。

（お軽、煙草盆を門口の源六に渡す）

源六　おお、すまねえな。

（お軽、戸を閉めて）

お軽　もしこちの人、私しゃもう行きますぞえ。私が行ったその後は、お年寄られた、父さん、母さん、みんなお前の世話じゃぞえ、とりわけ父さんは病い持ち、気をつけてくださんせ。エエ、エエ、頼んだぞえ。

〜親の死に目を露知らず、頼む不憫さ、いじらしさ。母は納戸を立ち出でて。

おかや　コレ娘、婿殿も夫婦の別れ、暇乞いもしたかろうけれど、そなたに未練が出ようかと、思うてのことであろう。随分ともにわずらわぬようにしてたもや。鼻紙、扇もなければ不自由、合薬の黒丸子も皆この中に入れてあるぞや。オオまだまだ言うておかねばならぬことはのう、その祇園町というところは、大勢のお客のその中に酒の上の心中立に、髪を切れの指を切れのという客もあるそうなが、髪は切っても伸びるもの、指など切ってたもんなや。何の因果で人並みの娘を持ちながら、この悲しい目を見ることじゃぞいの。

〜歯をくいしばり泣きければ。

お軽　母さん、何にも言うてくださんすな、何にも言うてくださんすな。聞けば聞くほど未練が残る・・・。こちの人、私しゃもう行きますぞえ・・・。エエ・・・エエ・・・さらばでござんす。

勘平　女房待て。

お軽　アイ。

〜いっそ打ち明けありのまま。

勘平　まめでいやれよ。

お軽　ア・・・。

源六　冗談言っちゃいけねえよ、オイ、まめでいられなきゃ、こっちがたまらねえじゃねえかよ。これがな、死に別れをするわけじゃなし、またな、とっつぁんにも、婿さんにも逢わしてやろうから、なぁ。そんな心配することありゃしねえよ。

（お軽、かごに乗せられる）

お軽　こちの人、父（とと）さんを頼みます。母さん・・・・。

おかや　達者でいてくれいのう。

（お才、花道にて）

お才　これ駕籠屋さん、気をつけてやっとくれ。

源六　おお、お袋お袋、何もそんなにめそめそすることはありゃしねぇよ。これがな、遠いところへ行く訳じゃなし、必ず心配しねえがいいや。

おかや　どうぞよろしうお頼み申します。

源六　おお、おお。

おかや　そうか、これは娘の身の回りのものでございます。

源六　オオそうかそうか。じゃぁ、おれが預かったよ。おお、おお、待ってくれ、待ってくれよ。まだ乗せ

るもんがあんだよ、乗せるものが・・・。オオ、駕籠屋、駕籠屋、エエ、豪勢急ぎやがるな。

おかや　体に気をつけてのう。患わぬようにのう、煩わぬよう・・・。

〜母はあと見送りて。

おかや　ハハハ・・・マァわしとした事が、あのような事言うて、娘もさぞ悲しい事であったであろう。コレ、コレ、婿殿どうしたものじゃ。もう親のわしさえ諦めたに、女房の事なぞくよくよ思うて、煩わぬようにしてくだされや、エ。これからは、わしも親父殿も、皆そなた一人が頼りじゃほどにナ、オオ、そうじゃ親父殿と言えば、こなさん親父殿に夕べ逢わしゃったそうなが、あの、どこで逢わしゃった。

勘平　あの・・・親父様にお目にかかった、と、ところでござりまするか。

おかや　おいのう。

勘平　そ、それはあの伏、伏見・・・。

おかや　ああ伏見か。

勘平　イヤイヤイヤ、淀。

おかや　ああ淀。

勘平　イヤイヤイヤ、た、た、た・・・。

〜口から出しだいめっぽう弥八、種子島の六、狸の角兵衛、親父の死骸にみの打ち着せ、どやどやと。

弥八　サァサァサァ。

三人　来たぞや、来たぞや。

へうちへ入り。

弥八　これ、ばさま、夜山（よやま）しもうて戻りがけ、高い山から谷底見れば。

六　瓜やなすびの花盛りでのうて、こちの親父殿がだまって死んでいたゆえに。

角兵衛　猟人仲間のおら達が連れて来ましたぞや。

弥八　よう改めて。

三人　うけとらっしゃれや。

おかや　テモびっくりするがナ。コリャ私としたことが、そのようなことを言うて・・・。ア、ああわかった、こりゃなんじゃナ。いつものように親父殿に呑めぬ酒呑ませて、あの様にして連れて来て、わしをびっくりさそうと思うてか。もうこっちにはチト気遣いなことのある最中じゃ、もうそのようなおどけはいい加減にして下されよ。

弥八　イヤイヤイヤ、おどけじゃござらぬ。

三人　仏じゃわいのう。

おかや　まだ言わっしゃるかいナ。鶴亀、鶴亀。もうそのようなおどけはもう大概にして下され。

弥八　マァよいからな、早う見さっしゃれや。

おかや　マァわしを驚かせようと思うて、そのようなことを・・・。マァ親父殿も親父殿じゃ、もう最前から

心配していたとこ、サ、アア、どこもここも泥まみれではないかいな、どこでこけさしゃった、そないに酒飲んで、サアサア早う起きさっしゃれ、コレ親父殿、早う起きさっしゃれ、起きさ・・・親父殿、親父殿・・・。コリャ親父殿が殺されている、アア、殺されている、親父殿が死んでいる、親父・・・誰があの様にしたのじゃ、親父殿はなぜあの様にしたのじゃ・・・。

三人　わしらは知らぬわいのう。

おかや　ア、婿殿、親父殿が死んでいる、親父殿が殺されている、親父殿が死んでいるわいの・・・。親父殿いのう。

〜呼べど叫べどその甲斐も、泣くよりほかの事ぞなき。猟人どもは口々に。

弥八　もっともじゃ、もっともじゃ、わしらも仇をとってやりたいが、あいにくおらがの山には堅木はのうて、杉の木ばっかり。

六　聞けばこちの婿殿は、もとはれっきとした侍じゃげな。仇を取ってもらわっしゃれ。

角兵衛　その時には助鉄砲のひとつやふたつ、どーん、どーんと打ってやりますぞや。

弥八　よう回向(えこう)して。

三人　やらっしゃれや。

弥八　ほんに思えば。

三人　笑止、笑止。

〜皆々我が家へ立ち帰る。

勘平　　とんでもないことをしてしまったな。

〜母は涙の暇よりも、勘平がそばへすり寄って。

おかや　　コレ婿殿、わしゃそなたにチト尋ねたいことがある。サアここへござれ、ここへござれ、ハテまぁここへござれというに。

よもやよもや、よもやとは思えども、わしゃどうも合点がゆかぬ、何ぼう以前が侍じゃとて、舅（しゅうと）の死に目見やしゃったら、びっくりもしやるはず。夕べこなさんが親父殿に逢うた時、金受取りはさしやらぬか、サ親父殿が何と言わしゃったか、それ言わしゃれ、何と言わしゃったか、サ、早う言わぬか、コレ言わぬか、言わ・・・、言われまい、言われまい、言われまい、言われぬ証拠これここに。

〜懐へ手を差し入れて、引き出す財布。

おかや　　この財布に血がついてあるからは、こなたが親父殿を殺したのじゃな。

勘平　　それは・・・。

おかや　　エエ、それはとはわごりょうはなぁ・・・。隠しても隠されぬ、天道さまが明らかだ、親父殿を殺して取ったその金は、誰にやる金じゃと思わっしゃる、みんなこなさんに渡す金じゃぞや。アア聞こえた、こりゃ身貧な親父ゆえ、娘を売ったその金を途中で半分くすねておいて、皆よこすまいと、それであのように、殺したの・・・イヤそうじゃわい。

勘平　そのようなことはございませぬ・・・。

おかや　そうじゃ、そうじゃわい、そうじゃわいなぁ・・・。今の今まで律儀な人じゃと思うていたに、あんまりあきれてコリャ涙さえ出ぬわいやい。

〜のういとしやなぁ与市兵衛どの。

おかや　畜生のような婿とは知らず、元の侍にしてやりたいと、世話さしゃったのが、かえってその身の仇（あだ）となったるか。飼犬に手を噛まるるとはこの事、ようもようもこの様に、むごたらしゅう殺したものじゃ、アノここな鬼よ蛇よ、親父殿を元のようにして返せ、とさまを生けて戻せヤイ。

〜遠慮会釈も荒男（あらお）の子の、たぶさ掴んで、引寄せ引寄せ叩きつけ。

おかや　ずたずたに切りさいなんでも、何のこれが腹が癒のう。

勘平　母者人・・・母者人・・・。

〜うらみの数々口説き立て、かっぱと伏して泣きいたる。

身のあやまりに勘平は、五体に熱湯の汗を流し、畳に喰いつき天罰と思い知ったる折こそあれ、深編笠の侍二人。

（不破、千崎、花道より出てくる。門口にて）

不破　早野勘平在宿（ざいしゅく）なるか、不破数右衛門。

千崎　千崎弥五郎。

両人　御意得たし。

〜と訪(おとの)えば、折悪しけれども勘平は。

勘平　只今、只今・・・。只今、只今・・・。只今、只今・・・。

（勘平、着崩れを直し、屏風で与市兵衛の死体を隠す。刀を持ち、刀の刃を鏡にして髪を直す。表に出迎えようとするところへ、おかやが引き留める）

おかや　おのれ、おのれどこへ行くのじゃ。

勘平　表に誰やら案内がござりまする。

おかや　イヤうそじゃ、うそじゃ。そのような事言うて逃げるのであろう。わしゃ逃がしゃせぬ、逃がしゃせぬぞい、逃がしゃせぬぞよ・・・。

勘平　情けなや。その様にお疑いなさるなら、私の腰へしっかりと、付いておいでなされませ。

〜腰ふさぎ脇挟んで出迎(いで)い。

勘平　ハハハ・・・これはこれはご両所には見苦しきあばら家へようこそ御入来(ごじゅらい)。

不破　見れば家内(かない)に取り込みのある様子。

勘平　イヤもう、ずんと些細な内証事(ないしょごと)、おかまいなくとも、いざまずあれへ、お通り下され。

両人　しからば。

〜しからば御免と打ち通る。二人が前に両手をつき。

勘平　ハッ、このたび殿の御大事にはずれたるは、拙者重々のあやまり、申し開きの言葉とてなし。何卒そ

れがしが科御赦免あって、亡君御年忌、諸家中もろとも相勤まりまする様、ご両所のおとりなし、ひとえに願いたてまつる。

〜と、身をへりくだり述べければ、数右衛門とりあえず。

不破　まずもってその方、貯えなき浪人の身にありながら、多くの金子調達せられし段、由良之助殿はなはだ感じ入られしが、不忠不義を働きしその方の金子をもって御石碑料に用いん事、亡君御尊霊の御心に叶うまじとあって、金子は封のまま差し戻さる。ソレ弥五郎殿。

千崎　ハッ。

〜言葉のうちより弥五郎、懐中より金取り出し、勘平が前にさしおけば、はっとばかりに気も転倒、母は涙ともろともに。

おかや　ヤイ、ヤイここな人でなし。今という今、親の罰思い知りおったか。モシ、お二人様聞かしゃって下さりませ。親父殿が年とって後生のことも思わずに、こいつを元の侍にしようと、娘を売って金と・・・

（勘平、おかやの喋るのを止めようとする）

おかや　エエ言わいでかい、言わいでかい・・・言わいでかいやい。

勘平　何でもござりませぬ。

おかや　娘を売って金ととのえて帰るを待ち伏せ、親父殿を殺して取った金じゃもの、何の御役に立つものぞ。どうぞ貴方がたの手でこいつを、ずたずたに切りさいなんで、仇をとってくださりませ。わしゃ腹が

立ちますわいの。

へ身を投げ伏して泣きいたる。聞くにおどろき弥五郎、刀おっとり勘平がそばへつめ寄って。

千崎　こりゃ勘平、非義非道の金とって、その身の科の詫びせよと、この弥五郎は申したかイヤサこの則安は申さぬぞよ。

勘平　ハハァ。

千崎　親同然の舅を殺し、金を奪いし重罪人、武士の道は耳へも入るまい。近江槍の田楽刺し、拙者が手料理ふるまおうか。

不破　あいや弥五郎殿、お待ちなされ。

千崎　じゃと申して。

不破　それがし思う仔細もあれば、お待ちなされ、はてまぁ、お待ちなされと申すに、まず、まず・・・。コリャ勘平、それへ出い、それへ出い、イヤ、ずずずっとそれへ出い。

勘平　ハァ。

不破　渇しても盗泉の水を呑まずとは、義者のいましめ、舅を殺しとったる金、亡君御尊霊の御用になろうか。生得汝が不忠不義の性根にて調達なしたる金子と推察あって、さし戻されし由良之助殿の御眼力、弥五郎殿、恐れ入ったの、イヤあっぱれ、あっぱれ。ただ情けなきはナ、この事世上に流布なさば、アレ見よ、塩冶判官が家来、早野勘平といえる者、非義非道を働きしと言われなばナ、汝ば

かりか、亡君御尊霊（ごそんれい）の御恥辱（おんちじょく）というところに心がつかぬか、うつけ者めが。

勘平　ハハァ。

不破　かほどの事をわきまえなき、その方にてはなかりしが、いかなる天魔の魅入（みい）りしか。コリャ勘平、おみゃどうしたものじゃ。かような場所に長居いたすは身のけがれ、それ弥五郎殿。

千崎　左様つかまつろう。

（勘平、出て行こうとする二人をひきとめ）

勘平　しばらく、しばらく・・・。

千崎　離さぬか、離せ。

勘平　しばらく、しばらく・・・。

千崎　のかぬか、のけ、のかぬか。

勘平　しばらく、しばらく、亡君御尊霊（ごそんれい）の御恥辱（おんちじょく）とあるからは、一通り申し開きな仕らん。サ武士の情けじゃ御両所方、お下にござってお聞き下され。

千崎　さあ申すことあらば早く申せ。早う申さぬか、早う申せ。

勘平　弥五郎殿、夜前貴殿にお目にかかり、別れて帰る道々も金の工面にとやかくと、心も暗きくらまぎれ、山越す猪に出会い、二つ玉の強薬（つよぐすり）切って放てばあやまたず、確かに手応え、立ち寄り見れば、猪にはあらで旅人（たびびと）、ナナ南無三宝（なむさんぼう）・・・。薬は・・・薬はなきかと懐中を探り見たれば、手に当たったる

金財布。道ならぬ・・・道ならぬ事とは知りながら、天より我に与うる金か、何にもせよ、すぐに貴殿に追いつき、お手渡し仕り、ヤレうれしや、徒党の数に入ったりと喜び勇んで立ち帰り、様子を聞けば情けない・・・。金は女房を売った金、打ちとめたるは・・・。

両人　打ちとめたるは。

勘平　舅（しゅうと）どの。

（勘平、刀を腹に突き刺す）

不破　ヤヤ。

両人　なんと。

勘平　いかなればこそ勘平は、三左衛門が嫡子と生まれ、十五の年より御近習（ごきんじゅ）勤め、代々塩冶のご扶持を受け、束の間御恩を忘れぬ身が、色に・・・色にふけったばっかりに、大事の場所にもありあわさず、その天罰に心を砕き、御仇討ちの連判に加わりたさに調達の金もかえって石瓦、鵤（いすか）の嘴（はし）と喰い違い、言訳なさに勘平が切腹なして相果つる、心のうちの苦しさを、ご両所ご推量くだされ。

へ血走る眼に無念の涙、仔細を聞くより弥五郎、ずんと立ち上がり、死骸引き上げ打ち返し傷口あらため。

千崎　これ見られよ、数右衛門どの。鉄砲傷には似たれども、まさしく刀でえぐりし傷。

不破　ナニ。オオ、これにて思いあたりしは、これへ参る道すがら、鉄砲うけたる旅人（りょじん）の死骸（しがい）。立ち寄り見れば斧定九郎（おのさだくろう）、強欲非道（ごうよくひどう）の親九太夫（おやくだゆう）ですら、見限って勘当なしたるあぶれもの。身のたたずみなきま

まに山賊なすと聞き及びしが、さては勘平が舅（しゅうと）を手にかけしは彼奴（きゃつ）が仕業（しわざ）、なら勘平は親の仇を討ったも同然。こりや、こりや勘平。

両人　早まったことをいたしたな。

〜言うに手負いは。

勘平　ドレ・・・。（傷口を確認して）オオ・・・。

〜見てびっくり、母も驚くばかりなり。

おかや　そんなら親父殿を殺したのは、婿殿ではなかったか。そうとは知らず、年寄りの愚痴な心から、恨み言うたのはわしが誤り。婿殿、堪忍して下されいのう。

〜と泣きわぶれば顔を上げ。

勘平　母者人、親父様を殺したは私ではござりませぬぞ。

おかや　おいのう。堪忍してくだされ。堪忍してくだされ・・・。

勘平　ご両所、お疑いは晴れましたか。

不破　いかにも疑い。

両人　晴れたるぞ。

勘平　かたじけない・・・。母者人、親父様の御最期も、女房の奉公も、反故にはなりませぬ。御企（おんくわだ）ての御用（ごよう）金（きん）、早く早く。

へいうに母も涙ながら、財布とともに二包み、二人が前に差しいだし。

おかや　婿殿が魂入ったこのお金、どうぞお役にお立て下さりませ。

不破　思えば思えばこの金は、縞の財布や紫麻黄金。

千崎　婿と舅の七々日、四十九日や五十両。

不破　あわせて百両百箇日、追善供養は老母の役。

千崎　あとねんごろに。

両人　弔われよ。

おかや　ありがとうござりまする。

（不破、千崎立ち上がり、勘平の傍へいき）

不破　仏果を得よや。

両人　早野勘平。

勘平　仏果とはけがらわしい。死なぬ死にはせぬぞ。魂魄この土にとどまって敵討ちの御供せいでおこうか。

へつっこむ刀引き回せば。

不破　ヤレ待て勘平、今際の際に汝に見する一品あり。待て、待て。

勘平　ハハァ。

（千崎、外を見まわして戸を閉める）

〽懐中より一巻取り出し。

不破　このたび亡君の御鬱憤（ごうっぷん）を放（ほう）ぜんと神文（しんもん）の取り交わし一味徒党の連判状。

〽聞きも終わらず苦痛の勘平。

勘平　して姓名は、た、た、誰々なるぞ。

不破　大星殿をはじめとして、徒党の人数は四十五人、今また汝を差し加え、一味の人数は四十六人、これを冥途の土産にいたせ。

勘平　ハハァ。

〽懐中の矢立を取り出し、姓名を書き記し。

不破　勘平。

両人　血判。

勘平　心得た。

〽心得たりと腹十字にかき切り、臓腑を掴んでしっかと押し。

不破　血判たしかに。

両人　受け取ったぞ。

〽あわれはかなき。

（幕）